「世界エイズデー（12/1）」に因んで

沖縄県立南部医療センター・こども医療センター　嘉数　光一郎

平成20（2008）年エイズ発生動向　－概要－によると、沖縄県は人口10万人当たりの患者数がHIV感染者全国3位（1.17）、エイズ患者全国4位（0.51）であり憂慮される。全国では新規発生件数は1,557件（HIV感染者1,126件、エイズ患者431件）と増加し、最近5ヶ年の増加が著しい（図1、図2、図3）。感染経路は、男性の同性間性的接触が多い（図4、図10）。報告数の上位10位はHIV感染者では東京都、大阪府、神奈川県、愛知県、福岡県、兵庫県、埼玉県、千葉県、静岡県、京都府で、エイズ患者では東京都、大阪府、愛知県、千葉県、神奈川県、埼玉県、兵庫県、北海道、福岡県、栃木県（図17）であった。

図1. HIV感染者及びAIDS患者報告数の年次推移

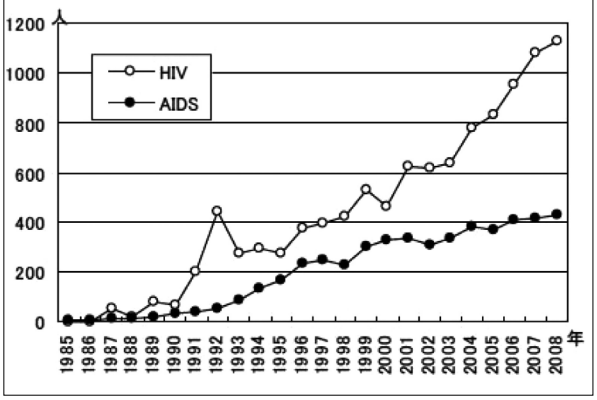


図2. HIV感染者報告数の国籍別、性別年次推移

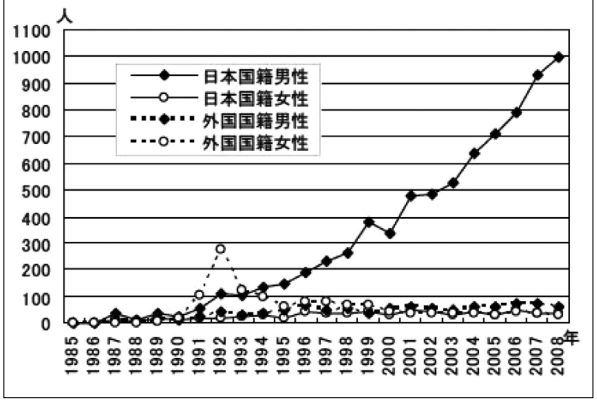


図3. AIDS患者報告数の国籍、性別年次推移

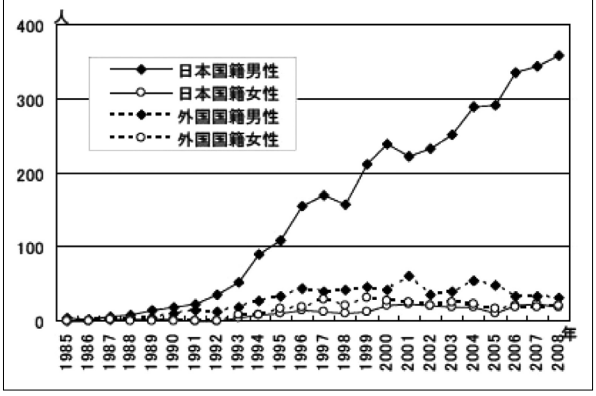


図4. HIV感染者の感染経路別内訳(平成20(2008)年報告例)

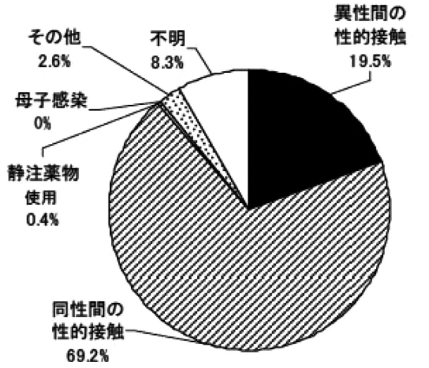


図10. AIDS患者の感染経路別内訳(平成20(2008)報告例)

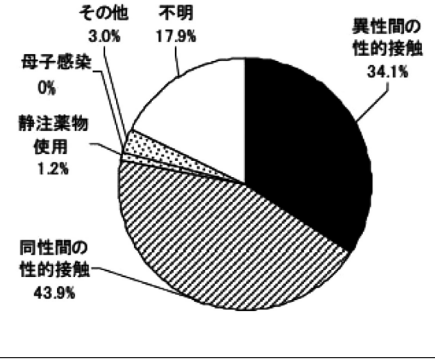


図17. HIV感染者、AIDS患者報告数上位10位の自治体

a HIV感染者上位自治体

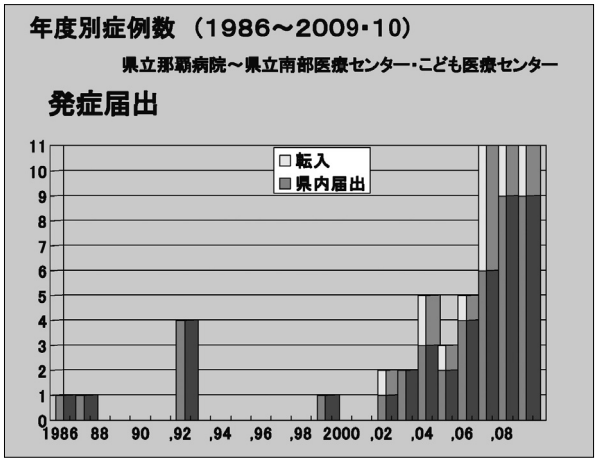
自治体	2008報告数	自治体	人口10万対*
1 東京都	447	1 東京都	3.50
2 大阪府	187	2 大阪府	2.12
3 神奈川県	66	3 沖縄県	1.17
4 愛知県	62	4 愛知県	0.84
5 福岡県	29	5 神奈川県	0.74
6 兵庫県	28	6 京都府	0.72
7 埼玉県	27	7 岡山県	0.72
8 千葉県	25	8 香川県	0.70
9 静岡県	24	9 石川県	0.68
10 京都府	19	10 滋賀県	0.64

b AIDS患者上位自治体

自治体	2008報告数	自治体	人口10万対*
1 東京都	96	1 東京都	0.75
2 大阪府	51	2 愛知県	0.64
3 愛知県	47	3 大阪府	0.58
4 千葉県	31	4 沖縄県	0.51
5 神奈川県	26	5 千葉県	0.51
6 埼玉県	14	6 栃木県	0.50
7 兵庫県	13	7 香川県	0.40
8 福岡県	12	8 長野県	0.37
9 北海道	12	9 岡山県	0.36
10 栃木県	10	10 石川県	0.34

HIV/AIDSは約25年前発見されてから今日まで全世界で多数の患者、死亡者が発生し今尚増加を続けている。この間HIV/AIDSの治療成績は大きく改善し、1994年以前はAZT単独療法であったが、現在は抗ウィルス薬の種類も増え、より有効なHAART療法が行えるようになり、最近は1日1回投与法を選択する症例が増えつつある。「治療ガイドライン」は毎年のように改定され、いまではAIDS指標疾患のみならず非指標疾患（心血管系疾患や悪性腫瘍など）をも含めた合併症を予防して、「非感染者に近い予後を実現できる治療」を実現するにはどうするのがベストかという時期にきている。チーム医療も推進され医師、看護師、薬剤師、ソーシャルワーカー、カウンセラー、歯科医師、理学療法士、栄養士など関係者が協力し合って診療に当たっている。県内でも特にここ5年間の患者数の増加が著しく、エイズ拠点病院として琉大病院、中部病院、当院の3カ所が指定されていてお互い情報交換をしながら診療に当たっている。

当院の症例：1986年～2009年10月の24年間に県立那覇病院及び県立南部医療センター・こども医療センターで診療したHIV/AIDS患者はのべ57人（男54名、女3名）であった。感染経路は男性同性間感染33例、異性間感染8例（夫婦間感染2例）、同性間・異性間感染2例、血液製剤3例、母子感染1例、不明10例であった。最近3年は年間新規患者数がそれぞれ11人と急増している。死亡は計7例で2004年以降は悪性リンパ腫合併例の1例のみで生命予後は著しく改善している（図5）。



（図5）

一方新規感染者を増やさないためにはどうすればいいか？難しい問題である。世界エイズデーには様々なキャンペーンが行われ注意喚起を促すムードが高まるが、その時限りにならぬよう、普段から気をつけたいものだ。今年の厚生労働省及びエイズ予防財団のテーマは以下の通りである。

Living Together
～いま、何をすれば良いのか聴かせて？～

サブテーマについて

コミュニケーションをとろうという姿勢を強く感じられるメッセージであり、HIV陽性者と暮らす人、セックスのパートナーがHIV陽性者である人、何かしらのボランティア活動をしようとしている人、といったHIVに関わろうとする人たちも共感できうるとの思いから、本サブテーマが選定されました。

HIV感染の増加が継続しているものの、身近な問題として捉えられる状況にまで至っていない中で、「HIVに感染している人も感染していない人も」HIVの問題に携わろうとする姿勢を表現しています。

また、HIV陽性者だけでなく、その周辺の人々（パートナー、友人、家族、同僚等）からの相談ニーズも増えている状況の中で、HIV陽性者及びその周辺の人々に対する思いやりの気持ちも込められています。

このような姿勢や思いをもつことでHIVを身近に感じることができ、ひいてはHIV予防やHIV検査体制の充実につながるというメッセージを発信します。